



Dialogue

Creating the Next 60 Years

『記念事業実施報告書』

2014年6月10日

献学60周年記念事業

同時通訳者・長井鞠子氏のトークショー



献学60周年記念事業
国際基督教大学



Dialogue

Creating the Next 60 Years

梅雨の中休みとなった6月10日(火)、本学卒業生(11期)で、会議通訳の第一人者として世界的に高く評価されている長井鞠子さんを迎え、学生を対象とした講演会「会議通訳者・長井鞠子氏のトークショー」が開催された。

長井さんは、国際的に重要な場面で内外の政財界のキーパーソンから指名を受けて、政治経済のみならずあらゆる分野で同時通訳、記者会見通訳、随員等をこなしていることで知られている。

放射状に椅子が配置された斬新なレイアウトの扇の要の位置に立って長井さんがトークを始めた頃には、ダイアログハウス国際会議室は、かつてない程の人で埋まり、立ち見も出たほどであった。

長井さんは、まず、ICUは自分にとってワクワクする「オモチャ箱」のようなものであったと遠い昔のICU生活4年間を生き生きと振り返った。何にでもためらわずに関心を寄せ、チャレンジするのが当時のICUのカルチャーであった。世界を舞台に活躍する長井さんの原点はまさにICUで過ごした4年間にあった。その後、2年生の時に経験した東京オリンピック大会での通訳業務が、彼女の生涯の職業となった。

通訳会社の草分けであるサイマル・インターナショナルに所属して始まった長井さんの通訳人生は、決して順調だったわけではなかった。幾多の失敗を経て、貴重な出会いを通して学んだことを自分のものにし、自分自身で納得のいくまで探求を続けるという仕事にかけてきた情熱があったからこそ今の自分があると語った。滑舌が効いた堂々とした語り口で、聴衆に語った30分間は圧巻だった。



Dialogue

Creating the Next 60 Years

最後は対話式で質疑応答に応じ、伝えたい“CONTENTS”を、磨いた“SKILL”と“PASSION”で伝えるという3点にこそ「伝える極意」があるという貴重な言葉を後輩に残し、トークを結んだ。トークショー終了後も、フリーの質問タイムとなり、去り難い学生たちがいつまでも長井鞠子さんを取り囲んでいたのが印象的であった。常に絶妙なアイコンタクトで落ち着きを持って会場を見渡し、聴衆の心をとらえる長井鞠子さんはまさに“伝える”プロフェッショナルそのものであった。

